

2つの『あひゞき』における語連接上の音韻現象について
——「は」「ば」の音節融合を中心に——

On the Phonological Phenomenon on Word Conjunction in the Two Works of "Aibiki" :
- Focusing on Syllable Fusion of "wa" and "ba" -

山口 豊

YAMAGUCHI Yutaka

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第18号 2023年

【研究ノート】

2 つの『あひゞき』における語連接上の音韻現象について

—— 「は」「ば」の音節融合を中心に——

On the Phonological Phenomenon on Word Conjunction in the Two Works of "Aibiki":
-Focusing on Syllable Fusion of "wa" and "ba"-

山口 豊

YAMAGUCHI Yutaka

要旨

日本近代文学史上初の言文一致文体で書かれた小説として、二葉亭四迷の作品群がある。『浮雲』と同時期に書かれたものに『あひゞき』があるが、これは明治 29 年に改訳されており、2 種類の同名の作品が存在することでも知られている。なぜ二葉亭四迷は改訳しようと考えたのか。明治 21 年に出されたものと明治 29 年に出されたものとはどういう点が違うのか。先行研究では取り上げられなかった語連接上の音韻現象である「音韻結合」に焦点を当て、両作品を比較することにした。その結果、明治 29 年のものには明治 21 年にはなかった用例が多く見られ、より江戸から続く庶民の会話に近づいており、登場人物をより庶民的に仕立てるための技巧が凝らされていることを明らかにした。

はじめに

日本近代文学史上、言文一致文体による小説については、明治 18 年に出された坪内逍遙の『小説神髓』に示された理論を体現化させた二葉亭四迷の『浮雲』(明治 20)から始まったというのが一般的である。この『浮雲』の文体成立について二葉亭四迷は「余が言文一致の由来」という文の中で次のように回顧していることが知られている⁽¹⁾。

もう何年ばかりになるか知らん、余程前のことだ。何か一つ書いて見たいとは思ったが、元來の文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで、坪内先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてゐよう、あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。

で、仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京辯だ。即ち東京辯の作物が一つ出来た譯だ。早速、先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが、忽ち碯と膝を打つて、これでいゝ、その儘でいゝ、生じつか直したりなんぞせぬ方がいゝ、とかう仰有る。

自分は少し氣味が悪かつたが、いゝと云ふのを怒る譯にも行かず、と云ふものゝ、内心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角、圓朝ばりであるから無論言文一致體にはなつてゐるが、茲にまだ問題がある。それは「私が……でゐます」調にしたものか、それとも、「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪内先生は敬語のない方がいゝと云ふお説である。自分は不服の點もないではなかつたが、直して貰はうとまで思つてゐる先生の仰有る事ではあ

り、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑もである。

文学史上非常に価値の高い『浮雲』と同時期に二葉亭四迷が発表した「あひゞき」(明治 21)も言文一致文体で描かれた作品として有名である。「あひゞき」はロシアの文豪、ツルゲーネフの『獵人日記』の中の一編を二葉亭四迷が訳した小説であり、当時の自然主義の作家、例えば国木田独步や田山花袋らに多大な影響を与えている。

その「あひゞき」(発表時は「あいびき」「あひゞき」)は発表後 8 年経った明治 29 年に再度、二葉亭四迷によって訳し直されて同じ題名(発表時は「あひゞき」)で発表されている。この同一訳者による同一作品のリメイク作品は語彙、語法、表記、表現等が比較しやすく、明治期の文学に起こった変化の例として既に多くの研究者によって研究が進められてきている。

先行研究の例をあげれば、太田絃子による『二葉亭四迷『あひゞき』の表記研究と本文・索引』では、2 作品に使用された語彙の比較が行われている⁽²⁾。また同氏は『二葉亭四迷『あひゞき』の語彙研究』においてこの 2 作品を比較した先行文献をリストアップして紹介している⁽³⁾。また湯浅英男は「二葉亭四迷のツルゲーネフ作『あいびき』の翻訳について—オノマトペなどをめぐる二つの訳文に関する若干の考察—」においてオノマトペと間投詞を俗語として着目し、どのようなロシア語表現のもとでオノマトペや間投詞が使用されているのかについて述べている⁽⁴⁾。

8 年の時を経たこの二つの文章はどちらも言文一致文体で書かれているが、受ける印象はずいぶんと違う。こ

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

の二つの文章についてどちらが優れているかと言う事はそれぞれにそれぞれのよさがあるから一概には言えないし、それについて答えを出すことが本稿の目的でもない。ただ、この違いを感じるというのは何に起因するのだろうか。すでに語種、オノマトペなど色々な観点から試みられている。しかし他にはないのだろうか。そこで今回は語連接上の音韻現象について着目し、その比較を通して印象の違いの要因を考察することにした。

語連接上の音韻現象について

音韻が変化する現象は全国各地の方言にも見られるが、明治時代に作られた標準語の基礎となった東京語の前身である江戸語においては顕著である。語連接上の音韻現象とは具体的にはいくつかの音が続いたときに音が変化する現象の事で、母音が連続したときに音の変化が起こる、いわゆる連母音としての音訛や助詞などが前接または下接する語との間に音の変化が起こる、いわゆる語連接上の音韻現象と呼ばれるものなどがある。本稿では連母音の音変化ではなく、語連接上の音変化について考えてみたい。

松村明『増補 江戸語東京語の研究』には語連接上の音韻現象のパターンとして「音節の融合」と「音節の転化」に分けて、江戸時代に書かれた『浮世風呂』『浮世床』の用例とともに解説し、「語の連接上の音韻現象としては、音節の融合と音節の転化との二つが考えられるが、音節の融合としては、各種の助詞の融合現象がいちじるしく、音節の転化としては、語連接上における促音化ならびに撥音化の現象がいちじるしく目立つものとして認められる。本稿において直接触れてはいないが、江戸語において、語の内部における音韻現象として、特に目立っている点としては、連母音の融合・促音化・撥音化などがあげられる。即ち、促音化ならびに撥音化の現象は、一語の内部の問題としても、また語と語とが接続した場合の問題としても、江戸語においては、等しく目立っているものなのである⁹⁾」とまとめているように、こうした音韻現象は江戸語を代表する特色であった。

ここで言う語連接上の音韻現象における音節の融合とは「テワ→チャー」「ノワ→ナー」「テイク→テク」など、①助詞とそれに先立つ語との融合、②助詞と助詞との融合、③助詞とそれに続く語との融合などの現象を指し、音節の転化とは「コトダ→コッタ」「モノダ→モンダ」「モノハ→モナー」など、①語連接上の促音化、②語連接上の撥音化、③音節の脱落などの現象を指す。

そこで明治21年発表の「あひびき」と明治29年発表の「あひびき」に使用されている語連接上の音韻現象のうち、音節の無融合現象に焦点をあて、使用頻度や種類を比較し、どちらがより江戸語に近いかということを確認することとした。

二つの作品に見られる語連接上の音韻現象について

『あひびき』は前述の通り明治21年と明治29年の2回発表されている。そこで、それぞれに使用されている語連接上の音韻現象の用例を比較していくこととする。以下、明治21年のものを「M21」、明治29年のものを「M29」と表記することとする。

助詞「は」「ば」の音節の融合現象を分類すると次のようになる。

係助詞「は」

- (i) ア列音に付く場合には、そのア列音の長音となる。
- (ii) イ列音に付く場合には、そのイ列音の拗長音となる。
- (iii) ウ列音に付く場合には、その同じ行のア列音の長音となる。
- (iv) エ列音に付く場合には二通りの形をとり、動詞に付く場合はそのエ列音に続いて「ヤー」の音となり、名詞に付く場合はそのイ列の拗長音となる。
- (v) オ列音に付く場合には、その同じ行のア列音の長音となる。

終助詞「は」

いずれもウ列音またはア列音に付いており、それは同じ行のア列音の長音となる。

接続助詞「ば」

- (イ) エ列音に連なる場合には、同じ行のイ列の拗長音となる。
- (ロ) 形容詞および打消しの助動詞「ぬ」の未然形「ず」に連なる場合は、すべて「は」と表記されている。
- (ハ) 「ない」に接続して「なければ」とあるべき場合に、融合現象を起こせば「ナケリヤー」となるのが普通であるが、それがまた「ネーキヤー」となることがある。

M21のものからは、全26例の語連接上の音韻現象の用例が見られた。以下にその用例を示す。なお、2回に分けて掲載されているので、底本は『二葉亭四迷『あひびき』の表記研究と本文・索引』に転載されている『国民之友』第25号(明治21年7月)及び『国民之友』第27号(明治21年8月)とした。

では→ぢや 【係助詞「は」(iv)】

- ① 用は多し、さうさうは仕切れるもんぢやない、(25号 P58 24行)
- ② こんなにお前さんの事を思ふのも、慾徳づくぢやないから…… (25号 P59 9行)
- ③ そんなら人のいふことならハイと云って聞てるがいゝぢやないか? (25号 P59 25行)
- ④ 何もこわいことハチッともないぢやないか? (25号 P59 27行)
- ⑤ うつくしいぢや有りませんか、(25号 P59 34行)
- ⑥ そっちの眼ぢやない (27号 P148 41行)

- ⑦ どうでも私たちの持つもん**ぢや**ないとみえる
(27号 P149 6行)
- ⑧ だが已を得ざる次第**ぢや**ないか (27号 P149 20行)
- ⑨ 暇乞ひならモウ是で済んでゐる**ぢや**なひか？
(27号 P150 2行)
- ⑩ もともと女房にされないのハ得心づく**ぢや**ないか？ (27号 P150 30行)
- ⑪ 得心づく**ぢや**ないか？ (27号 P150 30行)
【形容動詞の連用形 (iv)】
- ⑫ おまへだッて馬鹿**ぢや**有るまい (25号 P59 18行)
- ⑬ 勿論お前ハ馬鹿**ぢや**ない (25号 P59 21行)
【接続詞「は」(iv)】
- ⑭ それ**ぢや**明日お立ちなさるの。 (25号 P58 34行)
- ては→ちや・ちやア** 【係助詞「は」(iv)】
- ⑮ こわし**ちや**いけんぜ (27号 P148 35行)
- ⑯ 眼を細くしなくッ**ちや**いかない, (27号 P148 38行)
- ⑰ 頼むぜ『アクーリナ』泣かれ**ちやア**あやまる。 (25号 P58 29行)
- ⑱ 忘れ**ちやア**いやですよ (25号 P59 8行)
- それは→それやア** 【係助詞「は」(iv)】
- ⑲ **それやア**當座四五日ハちッとは淋しからうサ
(27号 P149 15行)
- ⑳ **それや**不思議なものよ！ (27号 P149 26行)
- なんぞは→なんざア** 【係助詞「は」(v)】
- ㉑ もしそうでもなッたらモウわたしの事**なんざア**
忘れておしまいなさるだろうネー (25号 P58 40行)
- には→にや** 【係助詞「は」(ii)】
- ㉒ 旦那もさうだが、おれにしてもこんなケチな所
に**や**いられない, (27号 P149 21行)
- ㉓ お前に**や**空々寂々だ (27号 P149 30行)
- ことは→こたア** 【係助詞「は」(v)】
- ㉔ わたしにハそんな**事ア**できないッ…… (25号 P59 11行)
- ㉕ そんな**事たア**百も承知してゐるくせに……
(27号 P150 2行)
- なりは→なりヤア** 【係助詞「は」(ii)】
- ㉖ これから先はどうなることかと思うと心細くッ
て心細くッて**なりヤア**しない…… (27号 P151 1行)
- はなは→はなア** 【係助詞「は」(i)】
- ㉗ あたし産れてからまだこんなうつくしい**花ア**見
たことないのよ。 (25号 P59 35行)

M29のものからは、全44例の語連接上の音韻現象の用

例が見られた。以下にその用例を示す。底本は『二葉亭四迷『あひゞき』の表記研究と本文・索引』に転載されている『かた恋』(春陽堂 明治29年11月)所収のものによる。

では→ぢや 【係助詞「は」(iv)】

- ① さうさうは仕盡れるもん**ぢや**ねえ。 (P207 6行)
- ② 慾徳づく**ぢや**ないんだから…… (P208 11行)
- ③ そんな詰らん言をいふもん**ぢや**ねえ。 (P209 7行)
- ④ お前も全然の百姓**ぢや**ねえ。 (P209 9行)
- ⑤ そつちの眼**ぢや**ねい, (P212 10行)
- ⑥ どうでも私達の持つもん**ぢや**ないと見える。
(P212 13行)
- ⑦ だが仕方がねえ**ぢや**ねえか？ (P213 9行)
- ⑧ 吾徒にや此様な鄙な所にやゐられねえ**ぢや**ねえか, (P213 10行)
- ⑨ 暇乞なら最う済んだ**ぢや**ねえか？ (P215 3行)
- ⑩ お前の没曉やにも困る**ぢや**ねえか。 (P216 8行)
- ⑪ もともと女房にされねえな得心づく**ぢや**ねえか？ (P216 9行)
- ⑫ え、得心づく**ぢや**ねえか？ (P216 10行)

【形容動詞の連用形 (iv)】

- ⑬ お前だッて馬鹿**ぢや**あるめえ, (P209 6行)
- ⑭ そりやお前は馬鹿**ぢや**ねえ, (P209 8行)
- ⑮ 綺麗**ぢや**有りませんか, (P210 4行)

【接続詞「は」(iv)】

- ⑯ それ**ぢや**明日お立なさるの？ (P207 13行)
- ては→ちや・ちやア** 【係助詞「は」(iv)】
- ⑰ 泣かれ**ちや**可厭。 (P207 9行)
- ⑱ 忘れ**ちや**厭よ (P208 10行)
- ⑲ 破し**ちや**不可ぜ。 (P212 5行)
- ⑳ お前さんに別れ**ちや**一日だッて辛抱が出来ない
(P213 4行)

それは→それやア 【係助詞「は」(iv)】

- ㉑ 忘れつこはねへーそりや…… (P208 8行)
- ㉒ **そりや**お前は馬鹿**ぢや**ねえ, (P209 8行)
- ㉓ 何んだ**そりや** (P209 12行)
- ㉔ **そりや**當座は些たあ辛からうさ。 (P213 6行)

なんぞは→なんざ 【係助詞「は」(v)】

- ㉕ 別れたら私の事**なんざ**忘れてお了ひなさるだらうねえ (P208 4行)

には→にや 【係助詞「は」(ii)】

- ㉖ 私に**や**そんな事あ出来ないわ…… (P208 12行)
- ㉗ 吾徒に**や**此様な鄙な所にやゐられねえ**ぢや**ねえか, (P213 9行)
- ㉘ 吾徒に**や**此様な鄙な所に**や**ゐられねえ**ぢや**ねえか, (P213 10行)
- ㉙ 田舎の冬と来た日に**や**怖毛を振つ了ふからな。

(P213 11 行)

③⑩ お前にや空々寂々だ。(P214 4 行)

ことは→こたア 【係助詞「は」(v)】

③⑪ 私にやそんな事あ出来ないわ…… (P208 13 行)

③⑫ そんな事あ百も承知してる癖に…… (P216 2 行)

とは→たあ 【係助詞「は」(v)】

③⑬ 些たあ親父の云ふ事も聴きねえ。(P208 7 行)

③⑭ そりや當座は些たあ辛からうさ。(P213 6 行)

はなは→はなア 【係助詞「は」(i)】

③⑮ 私やこんな綺麗な花あ始めて見てよ。(P210 4 行)

なきは→なきや 【係助詞「は」(ii)】

③⑯ あら、泣きやしませんよ (P207 12 行)

ないのは→ねえな 【係助詞「は」(v)】

③⑰ もともと女房にされねえな得心づくぢやねえか? (P216 9 行)

しれは→しれや 【係助詞「は」(iv)】

③⑱ 是から先は家に居るのが如何に辛いかわれやしない。(P217 5 行)

わたしは→わたしや 【係助詞「は」(ii)】

③⑲ 私やこんな綺麗な花あ始めて見てよ。(P210 4 行)

④① それを思ふと、私や……悲しくって……悲しくって…… (P217 7 行)

いるは→らあ 【終助詞「は」】

④② 馬鹿を言つてらあ、(P209 12 行)

ちがふは→ちがはあ 【終助詞「は」】

④③ 家だつて建前が違はあ、(P213 13 行)

なければ→なけりや 【接続助詞「ば」(ハ)】

④④ 来年でなけりや—さ来年か何時か。(P208 1 行)

あれば→ありや 【接続助詞「ば」(イ)】

④⑤ それから立派な町もありや、會社も有る、(P214 1 行)

分析

(1) どのようなパターンの語が増えているか

以上の用例からもわかるように、用例総数としては M21 には 26 例、M29 には 44 例の語連接上の音韻結合の用例が見られた。ではどのような語が M29 では増えたのだろうか？ それを一覧にしたのが表 1 である。M21 では音韻融合をしていなかったのに、M29 では音韻結合した語が 9 種類 11 例あることがわかる。

まずは第一人称「私」の場合、M21「あたし、生まれてからまだこんな美しい花ア見たことないのよ。」M29「私やこんな綺麗な花あ始めて見てよ。」とあり、「あたし〜のよ」と言う洗練された表現が、M29 では「私や

〜見てよ」と、かなりくだけた感じの表現となっている。またもう 1 例見られるが、M21 では言葉にならなかった部分を M29 ではさらに言葉を続けて自分の思いを吐露する表現をとっている。

次に、動詞との音韻結合が多くなっていることも特色の一つとなっている。

係助詞「は」もちろん、終助詞「は」接続助詞「ば」の用例も M29 には見られる。

M21 で、「是から先はどうなることかと思ふと心細くツて心細くツてなりやしない」という表現が、M29 では「是から先は家に居るのが如何に辛いかわれやしない。」という表現になっており、「なりやしない」という部分を「知れやしない」と書き換えている。

終助詞「は」の結合は M29 にのみ見られる。

M21「ツ、こわい。何もこわいことはちツともないぢやないか。」は M29 では「ヘン、馬鹿を言つてらあ。何が怖い事があるもんか！」と相手を否定したような表現に書き改められている。

M21「かう立派な建家、町、カイ社、文明開花—それや不思議なものよ！」という部分は、M29 では「家だつて建前が違はあ。それから立派な町もありや、會社も有る。何しても文明開化といふものだ」と、文を分割し、感動をより大きく表そうとしている。

並列を表す接続助詞「ば」の例も M29 にのみ見られる。「それから立派な町もありや、會社も有る。何しても文明開化といふものだ」という表現は、M21 では「かう立派な建家、町、カイ社、文明開花」と項目の一つとして扱われていて語連接上の音韻結合はみられない。

形容詞に順接の仮定条件を表す「ば」がついて音韻結合する例も M29 にのみ見られる。M21「来年でなければさらいねんだ。」は M29 では「来年でなけりや—さ来年か何時か。」と書き改められている。

形容動詞の連用形「で」と係助詞「は」の結合も新たに 1 例増えている。

M21「うつくしいぢや有りませんか」という助動詞＋係助詞「は」が結合して「ぢや」となっていたものが、

M29 では「綺麗ぢや有りませんか」と、形容動詞＋係助詞の用例に置き換えられている。これは「うつくしい」という形容詞を「綺麗だ」という形容動詞に置き換えたことによる変化の例である。

助詞にも新たに音韻結合に書き換えられている部分がある。

M21「もともと女房にされないのハ得心づくぢやないか？」と言う箇所は、M29 では「もともと女房にされねえな得心づくぢやないか？」と、連母音の音訛とともに助詞「の」＋係助詞「は」が、江戸の庶民のような口調に改められているのである。

(2) 連母音の増加との関係

M21 と比べると M29 の方がはるかに増加している現象がある。それは連母音の結合である。連母音とは字のごとく一語の中で母音の音節が続いた場合のことをさすが、そのとき音に変化することがある。たとえば「ない」という語は「nai」となるので母音「a」と母音「i」を連続して発音することになるのだが、「エー」と長音化して発音するようなものである。

連母音の融合は江戸時代の場合、比較的身分の低い人々がよく使用しており、武士階級の人々はあまり使用しなかったことが知られている⁽⁶⁾。

M29 で「何故？ 大丈夫、忘れつこはねえ、だがお前も是からは些と気を注げるが好きぜ、悪腕きも好加減にして、些たあ親父の云ふことも聴きねえ。おれは大丈夫だ、忘れつこはねえ—そりや…」(P208)という部分には連母音の結合が3か所に見られるが、M21 での該当箇所では「何故？ 大丈夫！ 忘れハしない、ガ「アクーリナ」ちツと是からハ気を附けるがいゝぜわるあがきもいゝ加減にして、をやちの云ふ事もちツとは聴くがいゝ。おれハ大丈夫だ、忘れる気遣ひハない、—それハなァ…イ」(25号 P59 1～5行)とあり、連母音は見られない。他の箇所でも同様である。M29 で「腹も立たねえが、お前の没晩やにも困るぢやねえか。如何すれば可いといふんだ？ もともと女房にされねえな得心づくぢやねえか？ え、得心づくぢやねえか？」(P216)は M21 では「腹も立たないが、お前のわからずやにも困る…… どうすればいい、といふんだ？ もともと女房にされないのハ得心づくぢやないか？ 得心づくぢやないか？」(27号 P150 28～30行)とやはり連母音は見られない。

語連接上の音韻結合や連母音の結合の様子からは M29 の方が登場人物に庶民的なイメージを強く打ち出していると言えよう。

(3) 『めぐりあい』との比較

二葉亭四迷には、実はもう一つ『あひゞき』と同じ時期に、同じように、同じ時を経て一つの作品を改訳して発表した作品がある。それが『めぐりあい』である⁽⁷⁾。この『めぐりあい』は主人公の私が、とある女性と三度にわたり、時と場所を違えて邂逅するという物語である。ただ、この作品の場合、M21 の方はあまりにも直訳過ぎて読みにくい印象を受ける。従って M29 のほうが日本語としてはこなれているものになっているようだ。この作品の中で語連接上の音韻結合をした会話をしているのは、私と3名の身分が低い男たちである。M21 の方では、全部で28例の用例が見られたが、うち21例は身分の低い男たちのものであった。M29 では、全部で29例の用例が見られたが、うち22例が身分の低い男たちの会話に登場していた。

式亭三馬の『浮世風呂』に関東訛りの男が登場して、ヤマノイモがうなぎになったという会話をしている箇所

(表1) 音韻「は」「ば」の結合品種別用例一覧				
前接の語	元の語形	用例	M21	M29
名詞	こと は(係)	こたア	2	2
	花 は(係)	花あ	1	1
代名詞	それ は(係)	それや(ア)	2	5
	私 は(係)	わたしや	0	2
副詞	ちっと は(係)	ちったあ	0	2
接続詞	それでは	それぢや	1	1
動詞	泣き は(係)	なきや	0	1
	しれ は(係)	しれや	0	1
	なり は(係)	なりや	1	0
	いる は(終)	いらあ	0	1
	ちがふ は(終)	ちがはあ	0	1
	あれ ば(接)	ありや	0	1
形容詞	なけれ ば(接)	なけりや	0	1
形容動詞	馬鹿で は(係)	馬鹿ぢや	2	2
	綺麗で は(係)	綺麗ぢや	0	1
助動詞	では(係)	ぢや	11	12
助詞	て は(係)	ちや(ちやア)	4	4
	なんぞ は(係)	なんぞア	1	1
	に は(係)	にや	2	5
	ない の は(係)	ねえな	0	1
計			27	44

があるが、その男の話しぶりを彷彿させるものとなっている⁽⁸⁾ことから、こうした音韻結合をする言葉を多用する者はあまりハイクラスな階級の人物ではないことを暗に示そうとしているように思える。

(4) 明治時代の文学の中の会話の表記

江戸時代において、語連接上の音韻結合や連母音の結合を庶民的な人物が使用することは松村明や小松寿雄らの調査で明らかであるが、それは明治期でも同じように用いられていたのかを確認するために明治の初期、中期、後期の会話文から語連接上の音韻結合の使用状況を確認することとした。引用したのは明治初期からは仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』、中期からは坪内逍遙『当世書生気質』、後期からは夏目漱石『吾輩は猫である』の中にある会話文の一節である。

『西洋道中膝栗毛』は1870(明治3)年に仮名垣魯文によって書かれたものであり、江戸時代の戯作の伝統を色濃く残した作品である。底本として『西洋道中膝栗毛』第二編(岩波書店 1958)を使用した。

弥 コレサ、そう手前勝手に立腹することも、ねへはエ。おらが鬚のとぐろを巻てみたのだつて、知らねへつらをしてみたじゃアねへか。ふ人情はおたがひだ。北 ライライ。そりゃア、まったくおれが知らなかつたからのことだ。エゝ人を面白くもねへ。地獄

の上を通りぬけて、栃萬里の旅を同行にするものが、おめへのやうな者と**連立やア**、病わづらひの時に**やア**、枕をはづすか、首でもしめるだらう。おらアモウ、おめへとは一處に**やア**あるかねへ。べら坊らしい (p81)

旅行者の弥次郎と喜多八は庶民の代表者であり、江戸っ子の流れを汲む人物と設定されている。

『当世書生気質』は 1885 (明治 18) 年に坪内逍遙が『小説神髓』の理論を具現化しようとして書いたものであり、近代日本文学に新たな一步を記そうとした画期的な小説である。底本として『当世書生気質』(岩波書店 2008) を使用した。

「吉住さん御覧なさい。なんと絶景**ぢやア**ないかね。今から直に還幸とは、ちと残りをしい次第だから、どうせ車夫の待せついでだ、あの葭簾張のあたりへいって、更に一喫煙としよう**ぢやア**ないか。」吉「実に夕陽に映ずる景色は、また格別と言はざるを得ずです。園田さんいかがです。お伴をしよう**ぢやア**ありませんか。」(pp.12-13)

こう話すのは金時計を見せびらかす銀行の役員らしき男であり、あえて通人ぶった言い方をする人物として書かれている人物の会話である。「通人」は江戸時代に義侠心に富み、しゃれっ気があり、吉原遊びに途方もない大金を使う遊び人で、金の使いっぷりが景気良く、男伊達でもあるという、江戸っ子気質を持った人たちの事をいい、札差業の人たちが多かったという。札差や両替商が後の銀行業になったことから連想したものであろうが、江戸っ子を表す言葉として語連接上の音韻結合が行われていたことが確認される。

この作品が出たすぐ後に M21 の『あいびき』が出されている。そして 8 年後の明治 29 年に改稿の『あひゞき』が出されている。その後明治 1 年に夏目漱石が『吾輩は猫である』を出している。

夏目漱石『吾輩は猫である』に登場する車屋の黒は教養のない主人に飼われている猫である。その猫の会話にも語連接上の音韻結合が見られる。底本として『吾輩は猫である』(新潮社 1986) を使用した。

「**己れあ**車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちっとも教育がないからあまり誰も交際しない。(中略)

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに極って**いらあ**な。御めえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強そうだ。車屋にいと御馳走が食えと見えるね」

「何におれ**なんぞ**、どこの国へ行つたって食べ物に不自由はしねえつもりだ。御めえなんかも茶臼ばかりぐるぐる廻っていねえで、ちっと己の後へくっ付

いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違えるように太れるぜ」

「追ってそう願う事にしよう。しかし家は教師の方が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

「箆棒め、うちなんかいくら大きくたって腹の足しになるもんか」(p14)

このように『あひゞき』の書かれた明治 21 年や明治 29 年の前後には普通に会話に語連接上の音韻結合が用いられていたことがわかる。さらにそれを使用していた人々は旧士族のような階級の人々ではなく、江戸っ子である町人の流れを汲んでいたこともわかる。また、地の文では表記されず、主に会話文において表記されていたこともわかる。

以上の事から次のような推測が成り立つと考えている。東京で育った二葉亭四迷にとって

1 会話にしか使用していないことから、語連接上の音訛は会話特有のものと認識していた。

これは他の作家の作品からもわかることだが、『あひゞき』においても「私」の語りの部分には使用されていないことからそのように認識していたと言える。

2 語連接上の音訛を用いた会話を作用するのは主に下層に属する者たちであることから、『あひゞき』に登場する男女についても暗にこの二人の身分や境遇を示すのに用いようとした。

ロシアの貧しい農家の二人の逢引きであったことを、わざわざ解説するまでもなく、話し言葉から自然と推測できるようにしようと意図的に用いられたと考えられる。

まとめ

『あひゞき』が改訳され、改訳された方に語連接上の音韻結合が多く見られるようになっているという事実は二葉亭四迷にとってそうするべきだという考えがあつたことに違いない。

ではどういう考えがあつたのかということだが、『めぐりあひ』を見てもわかるように、M21 は原文にできるだけ忠実に訳そうして、語順も直訳に近いものとなっている。幸い『あひゞき』ではさほど違和感を覚えなかったものとなったが、その結果、二人のイメージが洗練されたものとなってしまい、二葉亭四迷の意図には十分沿ったものになっていなかったのではないだろうか。機会を得て改訳することとなり、今度は貧しい農夫と娘の身に起きた悲しい物語であることを暗に読者に感じさせようとするものであつたように思えてならないのである。

此の際に在ては、徒らにコンマやピリオド、又は其の他の形にばかり拘泥してはいけな。先ず根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに翻訳するようにせなければならぬ。(中略) 其処で自分は考えた、翻訳はこうせねば成功せまい、自分のやり方では、形に拘泥するの結果、筆力が形に縛られる

から、読みづらく窮屈になる。これは宜しくジュコーフスキーの如く、形は全く別にして、唯だ原作に含まれたる詩想を発揮する方がよい⁽⁹⁾。

このように考えた二葉亭四迷は詩想を大切にしつつ自分のイメージの世界を自分の言葉で書こうと考えたようである。したがって、二葉亭四迷のなかでは改訳した方の男女の方がより自分のイメージに近かったものと思われる。

語連接上の音韻結合の用例も娘の「アクリーナ」よりも農夫の「ヴィクトル・アレクサンドルイチ」の方が多く使用しており、通人ぶった言い方もその行為とともに彼への嫌悪感を増大させるのに一役買っている。

今回は語連接上の音韻結合を中心に作品比較を試みたが、二葉亭四迷の改訳の意図の一環にも関係していることを明らかにできたと考えている。

注

- 注1 二葉亭四迷「余が言文一致の由来」『二葉亭四迷全集 第四巻』筑摩書房 1985 pp.171-173
- 注2 太田絃子『二葉亭四迷『あひゞき』の表記研究と本文・索引』和泉書院 1997
- 注3 太田絃子『二葉亭四迷『あひゞき』の語彙研究』和泉書院 2000
- 注4 湯浅英男「二葉亭四迷のツルゲーネフ作『あひゞき』の翻訳について—オノマトペなどをめぐる二つの訳文に関する若干の考察—」神戸大学 2013 pp.35-67
- 注5 松村明『増補 江戸語東京語の研究』東京堂出版 1998 pp.204-205
- 注6 山口豊「夢酔独言の国語学的価値」『夢酔独言総索引』武蔵野書院 1992 pp.194-224
- 注7 『めぐりあひ』はツルゲーネフの作品を翻訳したものであり、明治21年10月から同22年1月に『都の花』に掲載したものと、明治29年に翻訳小説集『かた戀』に掲載したものがある。なお、明治29年のものは題名が「奇遇」と改題されている。
- 注8 式亭三馬『浮世風呂』新日本古典文学大系 86 岩波書店 pp.30-31
- 注9 二葉亭四迷「余が翻譯の標準」『二葉亭四迷全集 第四巻』筑摩書房 1985 pp.166-170